

ティーチャー・トレーニング (TT) の実際とティーチャー・ トレーニング・センター (TTC) の構想*

牛 場 大 蔵**

ティーチャー・トレーニング (TT) の言葉は、高等教育においてはかなり新しいものであり、医学教育でそれが云々されてきたのはここ5、6年のことであろう。

われわれが最初にこのことに関心をもたされたのは、おそらく1972年、コペンハーゲンにおける第4回世界医学教育会議のときに、“Training the Teacher to Teach” というトピックが討議されたことに始まるかもしれない。そしてその後 WHO Study Group の “Training and Preparation of Teachers for Schools of Medicine and of Allied Health Sciences” という報告²⁾ が出され、同時にシドニーでの WHO の西太平洋地域 Teacher Training Center (TTC) での、第1回の多国間ワークショップが開かれて、しだいにその内容が明らかになってきたといえる。

1. TT とは何か

TTとは文字のとおり、ティーチャーを訓練するという意味であるが、ここではとくに医学教育すなわち医科大学、病院などの教育に携わる医師・医学者と、広く医療・保健関連領域における教育者について、ティーチャーとしての訓練をすることを指す。

その必要性については前掲文献¹⁾ が明らかにしている一部分を抄録的に紹介すれば、つぎのとおりである。

“医学校その他の新設に伴いこの方面のティーチャーは将来その数の増加が望まれると同時に、質的の変化が強く望まれる。伝統的に医学教員は各自の専門科目に通曉し、研究や専門の技術の習得によって、ティーチャーとしての資格を得てきたけれども、過去10年あまりの間に、このような能力だけでは、ティーチャーとして十分ではないということが明らかとなってきた。将来の量的および質的ニードに適するティーチャーとなるためには、過去の伝統的な教員養成システムとは異なった方法がみつけれねばならない。その裏づけとしては、①教

育科学と呼ばれる知識の母体が存在する、②医学その他の教育者は、この科学を知り、その応用技術を身につけることが、論理的にいて正しい、③教育科学は教育の効率と有効性を高めると同時に、乏しい資源、とくにティーチャーの時間と学生の時間の経済的使用において約束するものであるから、その系統的な応用は価値がある、④現在の教育の実際には非常な欠点のあるという多くの証拠があるが、それらのいくつかは教育者を訓練して健全な教育原理を応用せしめることによって修正されるものである、などのことがあげられる”。

また TT のプログラムの種類としては、つぎの4種が考えられている。

(1) 医療・保健専門職のティーチャー：もっとも直接学生に接して、かれらの日常の学習を指導する者。

(2) 教育専門家：一般ならびに特殊な教育学的問題を解決する専門知識をもつ者で、医療・保健関係、あるいは一般教育学の分野の基礎訓練を経た者でありうる。

(3) 教育リーダー：アカデミックな階級や称号とは別に、教育のプログラムに関して独立的な判断と重要な決定を下しうる者で、学部長や教育主任はもちろんであるが、他の教員もリーダーとなりうる。

(4) ティーチャーのティーチャー：直接学生の教育に携わる者でもなければ、また上記の(2)、(3)に相当する者でもないが(しかしそれらを兼ねることはもちろんありうる)、他の種類の者を助けてかれらの仕事を一層効果的ならしめる者。

なお、上記の分類は全般的にみたものであって、そのうちわが国の TT の現状は、医学教育者と看護学教育者に限られているといえよう。また本文では白書の性質上、医学教育者に限っての現状のみにふれることとする。

2. TT ワークショップ (TTWS)

上に述べたような TT の実行方法としては、従来もっぱらワークショップ (WS) 形式が用いられてきた。しかも限られた人数での数週間にわたる合宿形式もつ

* Practice of Teacher Training (TT) and Conception of Teacher Training Center.

** USHIBA, Daizo 慶応義塾大学名誉教授

とも有効とされ、さらにその一部分を普及するための数日間の WS が行われてきた(ミニ WS またはエコー WS とも呼ばれる)。

1) シドニーにおける多国間 WS

シドニーのニューサウスウェールズ大学には、WHO の西太平洋地域における TT のセンターがあって、地域の TTC (RTTC) と呼ばれているが、ここで1973年以来多くの多国間(西太平洋地域内) WS が催されてきた。わが国からもほとんど毎回参加し、その修了者は現在わが国内における種々の WS に指導的立場をとっている人が多い。その WS とわが国の参加者をあげればつぎのとおりである。

- 1973年6月9～22日, (テーマ) 一般教育, (参加者) 日野原重明, 館正知, 牛場大蔵(文献^{3),4)}。
- 1973年11月11日～12月8日, (テーマ) 一般教育, (参加者) 吉岡昭正, 豊川裕士(文献⁵⁾)。
- 1974年3月23日～4月6日, (テーマ) カリキュラムの計画と開発, (参加者) 尾島昭次, 鈴木淳一(文献⁶⁾)。
- 1974年6月8～21日, (テーマ) 評価, (参加者) 堀原一, 田中勲(文献⁷⁾)。
- 1974年9月1～13日, (テーマ) 教育方法, (参加者) 山下文雄, 岩淵勉(文献⁸⁾)。
- 1975年2月1～8日, (テーマ) TTC, (参加者) 森 亘, 北川定謙, 牛場大蔵(文献⁹⁾)。
- 1975年11月23日～12月5日, (テーマ) 評価, (参加者) 吉田修, 戸倉康之(文献¹⁰⁾)。
- 1976年5月16～28日, (テーマ) 医学部における全般的教育の変化, (参加者) 中川米造, 山本寅雄。
- 1976年12月5～18日, (テーマ) 教育デザイン, (参加者) 林 茂。

なお上記のほか1974年2月12～18日には同じシドニー RTTC で、WHO 主催の医学部長会議が行われ、医学教育とくに TT のことがセミナー形式で討議されたが、わが国からは真島英信, 金子義徳, 中馬一郎, 牛場大蔵の4人が参加した。

2) わが国における TTWS

TTWS の必要性が認識されて、わが国で第1回の全国的な WS がもたれたのは1974年12月のことであった。これは厚生省および文部省主催で、大学関係10名, 研修病院関係10名の参加者に限って12月14～21日まで、裾野市富士教育研修所で行われたものであるが、その内容の詳細は文献^{11,12)}に報告されている。第2回はまったく同様企画の下に1975年12月15～22日, 同じ場所で行われた¹³⁾。この2回とも教育一般と、カリキュラム計画をテ

ーマとし、それぞれ2人ずつシドニー RTTC からのコンサルタントが参加した¹³⁾。

第3回は従来の20名参加を40名まで拡張し、1977年1月10～17日, 同じテーマの下, 同じ場所で行われたが、今回から RTTC のコンサルタントの参加は要請されなかった。さらに第4回は参加者を28名とし、テーマを主として評価に重点をおいたものに変更して、1977年12月18～24日, 同じ場所で行われたが、従来援助を受けた文部省科学研究費が期限切れとなったために、日本医学教育学会が厚生省とともに主催者となった。第5回は第4回と同様の企画の下に、1978年12月に行われる予定である。

かくて全国的な TTWS は年1回の割合ですでに4回を経過し、その間計108名の修了者を出した。つぎに大学あるいは研修病院のレベルで、いわゆるミニ WS がもたれた頻度はつぎに示すように、3年間にのべ22回を数えている。それらはそれぞれの地域における TT の普及に効果をあげたものであるが、一部は文献¹⁴⁻¹⁶⁾に報告されている。

- | | | |
|----------------------|-----|-------------------|
| 筑波大学 | 第1回 | 1974年, 11月23～25日 |
| | 第2回 | 1975年, 7月30日～8月1日 |
| | 第3回 | 1976年, 7月31日～8月2日 |
| | 第4回 | 1977年, 7月30日～8月1日 |
| 旭川医科大学 | | |
| | 第1回 | 1975年, 8月24～26日 |
| | 第2回 | 1976年, 8月20, 21日 |
| | 第3回 | 1977年, 7月27, 28日 |
| 順天堂大学医学部 | | |
| | 第1回 | 1975年, 8月8日～9月2日 |
| | 第2回 | 1976年, 8月29～31日 |
| | 第3回 | 1977年, 8月6～8日 |
| 浜松医科大学 | | 1975年, 1月25, 26日 |
| 川崎市立病院 | | 1976年, 1月22日 |
| 佼正会病院 | | 1976年, 2月27～29日 |
| 千葉大学医学部 | | 1976年, 8月20, 21日 |
| 北九州地区 | 第1回 | 1976年, 10月9～11日 |
| | | (長崎大学医学部) |
| | 第2回 | 1977年, 8月30日～9月1日 |
| | | (久留米大学医学部) |
| 滋賀医科大学 | 第1回 | 1976年, 12月16, 17日 |
| | 第2回 | 1977年, 9月5～7日 |
| 岐阜大学医学部 | | 1977年, 7月21日 |
| 慶応義塾大学医学部 | | 1977年, 8月12～14日 |
| 武蔵野日赤病院 | | 1977年, 8月26～28日 |
| 山形大学医学部・山形県立中央病院(合同) | | |

1977年, 10月1, 2日

福岡大学医学部 1978年, 5月12, 13日

さらに特殊なものとしては, 1976年5月25, 26両日東京でとくに評価をテーマとしたWSが, シカゴのイリノイ大学医学部教育研究開発センターの専門家3名を講師として, 日本医学教育学会主催の下に開かれた^{17, 18)}.

3. ティーチャー・トレーニング・センター (TTC) の構想と現状

すでに述べたように WHO ではシドニーに西太平洋地域の TTC, すなわち地域 (Regional) TTC (RTTC) をもっているが, その構想は WHO の世界の各地域に1つずつの RTTC をつくり, その各地域内の国には国家的 (National) TTC (NTTC) をもって TT 活動を展開しようとするものである. また世界的には各 RTTC の中心となるものを1つ, Inter-RTTC (IRTTTC) と称して, 現在シカゴのイリノイ大学医学部にある教育研究開発センターにしている.

NTTC は各国における TT の中心となるべきもので, 上記 WS の運営のほか常時 TT に関する情報収集, 研究・開発などを行うもので, その必要性についてはしばしば強調されてきた^{19, 20)}. また WHO 西太平洋地域ではすでにフィリピンと韓国に設立されているが, いずれも国立大学医学部のなかにおかれている²¹⁾.

わが国における TTC の設立はまだ具体的となっていないが, 日本医学教育学会を中心に設立運動が進められており, 昭和52年3月には同会長名で下のような設立趣意書が関係方面へ配布された.

医学教育者トレーニング・センター (Teacher Training Center; TTC)

設立趣意書

国民医療を担う医師・医学者の養成は, 国家的にきわめて緊要な問題である. このことは先進国においては十分に認識され, 国家的に強力な組織の下に着々と医学教育の改善が進められている. 医学教育改善の必要性は医学の日進月歩, 医療情報の濃大化, 専門分化の進展による医療体系の変化, その他種々の原因によって, 教育のあり方が一時たりとも止まりえない流動的であることにもよるものであり, 社会のニーズに即した恒常的な改善方策こそは医療のあり方や医学の発展の基礎となる重大なことといわねばならない.

かかる観点からわが国の医学教育の現状をみると, 西洋医学を導入して以来百余年にわたる間, 遺憾ながら国家的組織によるその改善施策に欠けるものがあ

り, 終戦後制度上の変革はあったにせよ, 教育方法そのものにも旧態依然たる部分の残存することを否定できない. その間国際的の比較においてもわが国の医学校卒業生の知識水準がきわめて低いことが明らかとなり, また国民医療の水準もとくにその質において寒心に耐えない部分の多いことが社会的に問題視されてきた. 他方, 終戦後せっかく導入された実地訓練の場であるインターン制度が, 為政者の認識の薄さと医業者自身の関心の不十分さによって, 極度な悪条件による運営のために全国的な医学生の反対にあって20数年の後についえ去ったことは, それが当時全国を揺がせた大々的な学生運動の端緒となったという事実によってわれわれの記憶になお新しいところである.

かかる情勢にあってようやく全国的に医学教育に関する関心が芽生え始め, 医学教育改善の議論がインターン制度廃止を契機として百出した感がある. しかしながらつねに抽象的な空論に終わるきらいが多く, 具体的の実現にはほど遠いものがあつた.

それでは真に医学教育の改善を実現していくためには何がもっとも必要であろうか. その根本に横たわる手段の1つとして医学教育そのものを科学的に研究し, 近代教育学的アプローチによって具体的な改善をはかることがあげられる. 言葉を変えれば医学教育者ひとりひとりに教育に関する基本的な考え方と態度の養成, ならびに教育方法に関する知識と技能の修得を目標として, 集団的なトレーニングを課すことが, 医学教育改善のもっとも効率的な具体的方法といえるのである. この認識はつとに世界保健機関 (WHO) が多年の研究の結論として得たものであり, すでに国際的な実行によってその成果を明らかにしつつあるところであるが, わが国でもまたここ数年来, 小規模な集団の医学教育者トレーニングによって, その有効性を確認してきた.

しかしながらこの種のトレーニングはできる限り多くの医学教育者に及ぼす必要があり, かつ近時急速に増加しつつある全国の医育機関に成果を浸透せしめるためには, どうしても中央的な施設において頻繁に繰り返さねばならない. そのためにはかかる業務を主体としたトレーニング・センターを設立することが目下の急務というべきであろう. 本センターでは医学教育者トレーニングに関する大小のワークショップを定期的実施するとともに, トレーニングに関する文献情報の収集, 実施方法の評価と効率化に関する研究などを行う. また諸外国の同様なセンターとの国際的連携をはかることにより, わが国医学教育の水準をつねに

高めることを任務とする。

以上のように、緊急を要するわが国医学教育の改善のため、もっとも基本的かつ具体的な方策として、教育者トレーニングを主体とした国家的センター (Teacher Training Center; TTC) の設立をここに提唱するものである。

1977年3月

日本医学教育学会長

慶応義塾大学医学部教授

牛場大蔵

(付記)

1. 本文においてはすべて医学教育を対象として述べたが、もとより教育改善の必要性は医師のみに限らず、関連する保健部門の要員全般に関わるものである。その意味において広く保健要員教育を含むものと解釈されるべきである。したがって TTC の名称は、WHO では正式に TTC for Health Personnel といわれるものである。

2. 本センターの性格は国立または公的法人が望ましい。また国際関係において WHO の構想にある各国の“National TTC”の性格をもたせることが、将来の発展のため必要と思われる。

3. 建築物として別添設計図のようなものが望まれる。ただし宿泊部門については他施設を利用できる場合はかならずしも初期から必要としない(設計図略)。

また同年12月、日本医学教育学会には TTC 設立促進委員会が実行委員会の1つとして設けられた。

むすび

ここに述べた TT および TTC の問題は、比較的新しい医学教育に対するチャレンジとして、きわめて重要な問題を内蔵していると思われる。“先生は生れつきのもの”という考えは古くから医学教育を含めた高等教育一般に根をはっていたと考えられるけれども、いまやとくに医学関係の教育において、変遷する社会のニードに対応して真に望まれる、知識・態度・技能を備えた医師・医学者を養成するためには、新しい教育への取り組みと方法が必要であることは明らかである。もはや独断的で狭い経験による教育のしかたや、いたずらな試行錯誤の繰り返しは許されない。より効率的で採算性の高い教育を実践するために、われわれは十分に教育学の基礎を取り入れ、医学関係の教育に特徴的な体系をつくり出す必要がある。そのためもっとも基本的に必要なこととして TT が提唱され、TTC の存在が望まれる時代となった。

TT そのものの評価については、もちろん将来にまたねばならないことも多いが、従来行われてきた TT ワークショップの実績と反応とは、その有効性を約束するものとしてあまりあるものがある。

最後に TT あるいは TTWS についての意見や評価に関する内外の文献を参考のためにあげておきたい²²⁻³⁰⁾。

文献

- 1) Educating Tomorrow's Doctors (Fourth World Conference on Medical Education, Copenhagen 1972), The World Medical Assoc. Inc.
- 2) Training and preparation of teachers for schools of medicine and of allied health sciences, WHO Technical Report Series 521, 1972.
- 3) 牛場大蔵: 医学教育の革新を目指して—WHO ワークショップ参加報告—。医学教育, **5**: 60, 1974.
- 4) 館 正知: シドニーにおける Teacher Training のワークショップに参加して。医学教育, **5**: 73, 1974.
- 5) 吉岡昭正: シドニーの医学教育ワークショップに参加して。医学教育, **5**: 147, 1974.
- 6) 尾島昭次・鈴木淳一: シドニーにおける WHO ワークショップ“Curriculum Development”参加報告。医学教育, **5**: 213, 1974.
- 7) 堀 原一・田中 勲: シドニーにおける WHO ワークショップ“医学教育における評価”参加報告。医学教育, **5**: 341, 1974.
- 8) 岩淵 勉・山下文雄: 教育学習方法に関する WHO 国際ワークショップ報告。医学教育, **6**: 167, 1975.
- 9) 北川定謙: WHO 主催 TTC ワークショップに出席して。日本医事新報, **2665**: 85, 1975.
- 10) 吉田 修・戸倉康之: シドニーにおける WHO “評価”に関するワークショップ参加報告。医学教育, **7**: 369, 1976.
- 11) 第1回医学教育者ワークショップ(特集)。医学教育, **6**: 9-98, 1975.
- 12) 牛場大蔵, 林 茂: 「医学教育者のためのワークショップ(第1回)」の印象。日本医事新報, **2647**: 87, 1975.
- 13) 第2回医学教育者のためのワークショップ(報告)。医学教育, **7**: 140, 1976.
- 14) 四大学の医学教育カリキュラム・ワークショップ(報告)。医学教育, **7**: 71, 1976.
- 15) 医学教育ワークショップ報告(機関会員報告)。医学教育, **8**: 42, 1977.
- 16) 牛場大蔵: 慶応義塾大学医学部第1回医学教育ワークショップ報告。慶応医学, **54**: 631, 1977.
- 17) 尾島昭次: 評価に関する医学教育ワークショップ参加報告。医学教育, **7**: 334, 1976.
- 18) 長島親男: 「評価に関する医学教育ワークショップ

- ブ」に参加して、日本医事新報、**2746**: 93, 1976.
- 19) 牛場大蔵：医学教育における改革の方向一百の論議より一つの TTC を一。モダン・メディスン、**1**月号：68, 1974.
 - 20) 鈴木淳一・尾島昭次：Teacher Training Center (TTC) の設立と Workshop. 医学教育, **5**: 208, 1974.
 - 21) Ko, Kwang Wook: ソウル大学における医学教育と NTTC. 医学教育, **8**: 410, 1977.
 - 22) Anderson, J., et al.: The workshop as a learning system in medical teacher education. *Brit. J. Med. Educ.*, **6**: 296, 1972.
 - 23) Anderson, J., et al.: Training of medical teachers. *Lancet*, **2**: 566, 1974.
 - 24) Thomsen. O.B.: Training of medical teachers in pedagogy. *WHO Chronicle*, **27**: 8, 1973.
 - 25) Cantrell, T.: How do medical school staff learn to teach? *Lancet*, **2**: 724, 1973.
 - 26) Farr, W.C. & Heider, M.: Medical education workshops. A study of their influence on teaching behavior of medical college faculty. *Ohio State Med. J.*, **70**: 102, 1974.
 - 27) 牛場大蔵：Teacher Training. 医学教育, **6**: 1, 1975.
 - 28) (Editorial) Teacher training in medical schools. *Brit. J. Med. Educ.*, **9**: 2, 1975.
 - 29) Gale, J., et al.: Changing attitude of medical teachers towards medical education. *Med. Educ.*, **10**: 250, 1976.
 - 30) 牛場大蔵：医学教育改善の具体策。日本医事新報, **2765**: 93, 1977.

* * *